アラゴン

大島博光著

新日本新書 416

苦しみをともなわないような愛はない／ひとの心を疼かせないような愛はない…　民衆の心に愛と勇気をあたえ、たたかいを鼓舞した詩人の生涯。

定価720円（本体699円・税21

大島　博光（おおしま　はっこう）

1910年　長野県生まれ
早稲田大学文学部フランス文学科卒
主な著書　『抵抗と愛の讃歌』（東邦出版社）
『パリ・コミューンの詩人たち』（新日本新書）
『愛と革命の詩人　ネルーダ』（大月書店）
『レジスタンスと詩人たち』（白石書店）
『詩集　ひとを愛するものは』（新日本出版社）
『大島博光全詩集』（青磁社）
『ピカソ』（新日本新書）
『ランボオ』（新日本新書）
『エリュアール』（新日本新書）
主な訳書　『エリュアール選集』（緑書房）
『アラゴン詩集』（飯塚書店）
『ギュヴィック詩集』（飯塚書店）
『ネルーダ詩集』（角川書店）
『ネルーダ最後の詩集』（新日本出版社）
『アラゴン選集』（全三巻・共訳，飯塚書店）
『フランスの起床ラッパ』（新日本文庫）

アラゴン　　新日本新書　416

1990年11月25日　初　版©

著者　大　島　博　光

発行者　山　本　　功

郵便番号 151　東京都渋谷区千駄ヶ谷4－25－6

発行所　株式会社　新日本出版社

電　話　東京（423）8402（営業）
（423）9323（編集）
振替番号　東京　3－13681

印刷　亨有堂印刷　　製本　みさと製本

落丁・乱丁がありましたらおとりかえいたします．
本書の内容の一部または全体を無断で複写複製(コピー)して配布することは，法律で認められた場合を除き，著作者および出版社の権利の侵害になります．小社あて事前に承諾をお求めください．

ISBN4-406-01902-2　C0298
Printed in Japan

江苏工业学院图书馆
藏书章

大島博光

新日本新書＝416

目次

序にかえて　7

1　彼らは　夢を抱いて　四方からやってくる……　13

私生児アラゴン　15

少年時代　23

第一次世界大戦　27

アラゴンとランボオと　31

パリのダダ――怒れる若者たち　34

クララ・ツェトキンとツール大会　39

モロッコ戦争・入党　45

ヴェネチアの悲劇　53

エルザの登場　61

此为试读,需要完整PDF请访问: www.ertongbook.com

ソヴェト訪問・ハリコフ会議　67
『赤色戦線』・アラゴン事件　72
『ウラル万歳！』　78
スペイン戦争・第二次世界大戦の前夜　84
もし　もう一度　行けとなら……　91
第二次世界大戦　93
ひき裂かれた恋びとたち　99
荆(サンタ・エスピナ)の冠　104
リラと薔薇　108
レジスタンス　111
リベラックの教訓　116
ニース滞在・マチスとの親交　125
『殉難者たちの証人』　130

ブロセリアンドの森 133
地下生活 136
『グレヴァン蠟人形館』 152
『フランスの起床ラッパ』 158
女は男の未来だ……163
解放と幻滅 165
スターリンの肖像事件 172
『眼と記憶』 177
『未完の物語』 184
『エルザ』 192
『詩人たち』 197
『エルザの狂人』 203
自由のために 214

エルザの死・『告別詩集』　220
終(つい)の住みか・ヴァランヌ街と死　225

序にかえて

こんど、アラゴンの評伝を書くにあたり、あらためてその生涯をたどってみて、わたしがとりわけ感じたことのひとつは、社会主義におけるスターリンおよびブレジネフの逸脱と犯罪にたいして、アラゴンがいかに苦悩にみちた反省と批判を加え、さらにこれとたたかったかということである。

とりわけアラゴンは、一九六八年のチェコスロバキアにおける民主化改革「プラハの春」を支持し、戦車によってこれをふみにじったものたちを非難し、声をあげてこれとたたかった。

一九八九年に始まった、東欧の社会主義諸国における激動ほどに、歴史の弁証法的展開、その平坦でない歩みを劇的に示しているものはない。そして一九八九年秋以来のチェコスロバキアにおける「プラハの春」の再現はとりわけ象徴的である。アラゴンが生きていたなら、「プラハの春」の再来にどんな感慨を抱いたことだろう。

もともとソ連など五カ国軍のチェコ侵入に反対したアラゴンの闘争は、スターリンの逸脱と犯罪にたいする闘争の延長線上にあった。

一九五六年二月、ソヴェト共産党第二十回大会におけるフルシチョフ報告は、初めてスター

リンの逸脱と犯罪を公然と告発した。この報告はフランスじゅうに、とりわけ左翼の知識人たちに前例のない衝撃を与えた。なかでもスターリンを信頼して活動してきたアラゴンにとって、それは深刻な打撃、動揺、苦悩、絶望を与えずにはおかなかった。

千九百五十六年がやってきた　瞼に突きつけられた匕首のように
きみがいなかったら　わたしはただ石を投げつけられる男でしかなかったろう

（『未完の物語』）

アラゴンは、「スターリン時代の悲劇」がひとたび暴露されると、それは自分にはかかわりのないことだと考えるような人びとにはぞくさなかった。かれはこの問題を自分の傷口として受けとめ、「責任の精神」をもって反省し、批判する。一九六三年、アラゴンはガローディの著書への序文でスターリンの逸脱と犯罪にたいしてはっきりと理論的な批判を加える。

「……マルクス主義はすべての人びとに語りかける。科学的仮定としての賭から語りかける。したがってこの賭を危うくするような誤りは人類にたいする犯罪の色合いをもつ。本来、マルクス主義のなかには、逸脱や犯罪の席はないし、あってはならない。それはマルクス主義の否認であり、裏切りであり、背反である。重要なことはマルクス主義の修正ではなく、反対にマルクス主義の復元である……」

この最後の部分は、我々の言葉でいえば、科学的社会主義を堅持するということである。

さて、一九六〇年代の東欧では、政治や文化の面で非スターリン化が実現し、本来の科学的社会主義が復元されるものと信じられていた。しかしそれはむなしい期待・幻想にすぎなかった。一九六八年八月、社会主義大国による覇権主義的逸脱と犯罪は、ソ連など五カ国軍のチェコスロバキア侵入へとさらにエスカレートする。このブレジネフによる覇権主義的逸脱と犯罪にたいして、アラゴンはひきつづきたたかいつづける。彼は自分の編集する「レットル・フランセーズ」紙に声明を発表する。

「外国の軍隊によって侵入されたチェコスロヴァキアの不幸を、われわれは激しい痛みをもって思いやる。われわれは侵入者にたいする勇敢な闘争によって死の苦しみをなめているチェコスロヴァキアの友人たちとともに生きている。彼らは、何よりも民主主義の本質的な要素をなす、あらゆる形式による表現の自由、新聞出版の完全な自由を彼らの国から奪いとろうとするあらゆる試みにたいして勇敢に闘っているのである……」

このようなスターリンとブレジネフの逸脱と犯罪は、アラゴンに苦渋・絶望をあたえ、だんだんペシミストにする。一九六六年に書かれた「ネルーダへの悲歌」のなかからも、このペシミストのひびきを聞きとることができる。

あるのはただ苦しみの世界　血まみれの世界ばかり

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

どんなに遠く行っても　何んにも変りはしない
空の高みに　白みかける朝を見たと思ったら
それは　遠くの自動車のヘッドライトなのだ

もう闇のなかを　おのれの膝もわからぬほど歩いたのに
　来るべき世界には　まだ辿りつけぬ

わが友パブロよ　なんとわれらは耐えてきたことか
影は　われらの前に伸びる　長く伸びる……

このようにスターリン・ブレジネフの逸脱と犯罪にたいして、深い苦渋・絶望を抱きながら、なお社会主義・共産主義を擁護しつづけようとしたアラゴンは、その精神状況をつぎのようにも書く。

「私という人間は……一生をつうじて或る幾つかのことを絶望的に信じた人々、また溺れかけている泳ぎ手のような、だが両腕の最後の力をふりしぼって、十中八、九助からないと分かっていても、何とかして助けだしたいと思う子供を頭上たかく持ちあげつづけている泳ぎ手の

ような人々、そうした人々のカテゴリーに属しているのである」（稲田三吉訳）

また、『エルザの狂人』（一九六三年）のなかにはつぎのような詩句がある。

たとえ　相も変らず牢獄や車刑にあう肉体があり
相も変らず　虐殺が偶像によって正当化され
死体のうえには　あの言葉のマントが投げかけられ
口には猿ぐつわ　手には釘がうちこまれようと

だがいつか来るだろう　オレンジ色をした日が
額に月桂冠をいただく　勝利の日が来るだろう
銃を肩から下して　人びとの愛し合う日が来るだろう
小鳥が　いちばん高い梢（こずえ）でさえずり歌うような日が……

「虐殺が偶像によって正当化され……」と書いたとき、アラゴンは恐らくヒットラーよりはむしろスターリンを念頭においていたであろう。そうして怖るべきこの一行は我々に、一九八九年六月の中国・天安門広場における虐殺を思い出させずにはおかないだろう。しかしその絶望と苦悩を越えて、「いちばん高い梢でさえずりうたう小鳥」のように、詩人は歌ったのである。

だがいつか来るだろう　オレンジ色をした日が……

こう歌ったアラゴンの希望の背後には、「重要なことは、マルクス主義（科学的社会主義＝著者）への復元である」と語った、その思想的確信があったことを忘れてはならない。そこに変えるべき生があり、変革すべき世界があるかぎり、詩人は希望をかかげつづけたのである。

こんにち、東欧におけるスターリン・ブレジネフ型社会体制の混迷・崩壊に乗じて、社会主義・共産主義の理念にたいする攻撃が熾烈をきわめているとき、アラゴンのこの思想的確信と希望は、彼が我々にのこした偉大な教訓のひとつであるようにわたしは思う。

一九九〇年十月

1

彼らは 夢を抱いて 四方からやってくる……

Aragon à l'époque du 《Paysan de Paris》. ▶

私生児アラゴン

生まれながらにわたしが生きるのはまちがっていた

ルイ・アラゴンは、一八九七年十月三日、パリの廃兵院（アンヴァリード）に近いヴァノオ街に私生児として生まれた。のちにアラゴン自身がこう語っている。

「……私はパリの廃兵院（アンヴァリード）の前の広場で生まれたんだ。母はそこを横切ろうとしていた。そのころは、あの記念建造物のわきに木立ちがあった。と突然、私は母の産道に首を出しかけたんだね。母がその時のことを物語ってくれた。彼女は歩道に身を横たえた。何人かの人が、すぐに彼女をつれていった。おかしなことに、そこと目と鼻のところに病院があった。産院がね。で、私はそこで生まれたんだよ。ひょっとしたら私は、そこの歩道の上で生まれていたのかも知れない。……私の家族は、その場所のすぐ近くにある家に住んでいた。……それで、おしゃべり好きな管理人や近所の人たちの鼻先で、新しく子どもが生まれたことから醜聞をひき起こ

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com